

不登校と引きこもりからの出発

— 青年期の発達と家族支援 —

国 松 清 子

Departure from non attendance at school and shutting himself up

Kiyoko Kunimatsu

1、始めに

不登校は当の児童、生徒が苦しむだけではなく、身近な家族をも巻き込んで家族の危機としても取り組まざるを得ない状況が生じる。今回は、当の本人は現れることはなかったが家族、特に母親が長男としての息子の問題に苦しんで熱心に筆者のもとを訪れ、家族の力で子どもを支え続けた事例を紹介したい。不登校自体は学校に現われにくい状況が生じるだけではなく、学校に象徴されるような他者ということや交流が求められるような他の社会場面からの撤退をも同時に進行させてしまうことが多い。つまり、引きこもりが同時に起きやすく当然のごとく家族が子どもを一身に引き受けざるを得ない状況おきてしまう。当人だけではなく家族が苦しむのはそこからである。学校どころか外にも出ようとしないう家族を抱えて、家族が今度はおろおろしてしまうわけである。もともと、家族関係に病理が隠れていたりすると、むしろ不登校の子どもがいることで家族関係が落ち着いてしまって、子どもが家にいることが救いとなる場合すらある。例えば3世代同居の家庭で祖父母と親世代の関係に緊張関係があったりすると、子ども世代がその緊張関係を緩めるような働きをしていることが少なくない。そうした場合子どもが家にいると不登校であるという問題状況があっても、実際的には家族間の緊張が緩むので家族としてはむしろそこで落ち付いてしまうわけである。この場合は、家族間に隠されて、或いは意識されて苦しんでいる場合でも、こうした大人の間で生じている問題を先に取り上げない限り事態は動かない、ということになりやすい。今回、取り上げた家族にはかつて祖父母世代と親世代での葛藤があったものの、葛藤の対象であった姑を亡くす、という状況にあり、母親は子どもの問題に集中することが可能であった。母親との面接からやがて父親の登場と家族が必死で本人と向き合おうとした過程を報告したい。

2、面接状況

本ケースはスクールカウンセリングの中で、担任からの紹介のもとで毎回、学校の面接室で行われた。必要に応じて担任との打ち合わせも行いながら、当人は当初引きこもりにあったために学校へは母親のみの登場であった。展開によって途中から本人が学校へ現れるようになって、筆者と本人は面接室で

会うことはなく母親との面接を一貫して続けた。

本人との面接を持たなかったのは本人にそのニーズがなく、かつ当時は不登校の理由が学校恐怖症状態にあって、不登校の原因をすべて外側、つまり学校で生じる現象すべてに怯えていたためである。従って、学校に現われても全く校内を移動しないですむ状況を必要としたため保健室登校に限定された。筆者はこのため養護教諭との連携につとめ、本人の学校での状況の把握に努めた。母親との面接の中では何でも安心して話しやすい状況を設ける必要があるため、特に学校にとって都合の悪いことでは言いやすい状況を設けるためにも学校側と筆者が細かく連携していることは特に伝えることはなかった。学校側にはまず、担任支援として学校内での生徒の処遇を巡っての必要な情報はできるだけ伝え、また、関連職種（養護教諭）との連携、協力にもつとめた。これらに母親との面接から得たものが直接、間接にも役に立ったのはいうまでもない。筆者のような職種には守秘義務が課せられているのは当然であるが、学校での問題解決も必要な場合は、守秘義務は学校側との担当者にまで延長されて必要な情報や考えを伝え、支援としたのである。この不安定な状況は、全く筆者個人に課せられていて、これらを総合的にmanagementすることが筆者の役割である。

3、事例の紹介

クライアント：高校1年生の男子（15歳） A君の母親Bさん

主 訴：不登校

家 族：父親（50歳 会社員） 母親（48歳 主婦） 本人（高校1年 15歳）
妹（中学2年 13歳） 父方祖母（76歳入院中） 父方祖父（78歳 兼業農家）

4、生育歴・現病歴

満期安産で出産、順調に生育、特に問題はなかった。長男として祖父母の期待は大きく、子育てについての干渉が多くつらかった時期もあった。幼稚園時代は活発でよく注意を受けるくらいであった。小学校では友人も多くよく外で遊んでいた。3年生の時いじめにあったことがあって、これは母親が担任に話をして解決したと思う。特に不登校などになることもなかったがそれ以後か、おとなしくなったように思う。5、6年生までは近所の子ども達とよく遊んでいた。中学校に入ってから皆がクラブ活動や塾に通いだして、遊ぶこともなくなってしまった。Aも当初はクラブに入ろうとして色々考えていたが結局入ることもなかった。そして2年生の1学期にプールに入るために着替えをしている時、戸びらをあけっぱなしにしたとかで彼が友人たちから怒鳴られるということがあった。彼は扉をあけっぱなしにしたという意識もなかったようで、どうして皆から非難を受けたのかわからない様子だったという。こうしたことからクラス生とはぎくしゃくしたようになった。3年になり、修学旅行の出し物の練習中、リーダー生徒からふざけている、と足蹴りにされ、その翌日から一日も登校しなかった。母親も学校の

対応に非常に不満を持っていて、卒業証書を担任が家に届けたときも不快感をあらわにしたという。Aはこの間全く家を出ることなく引きこもっていた。母親が学校のことを問い詰めると、追い詰められたように母親に暴力を振るうことがあった。

5、学校側との調整

コーディネーターより紹介があり、担任とまず話し合った。今回、きっかけとなったロッカー事件についてうかがう（5月下旬）。入学以来比較的一緒にいたと思われるクラス生たちと下足室（ロッカー設置）にいた時のある生徒から暴力を受ける。本人は暴力を振るわなかったが、「自分も殴ればよかった」と涙ぐむ。この件では相手生徒は停学措置、本人は校長訓戒となる。クラスではAについても「どうして停学にならないのか」という声があった。その後体育祭あたりから欠席がちとなる。6月中旬、やっと制服を着たのに登校しないので母親がカッとなって手を出すと「他のクラスの知らない子にいじめられている」と漏らした。問い詰めると詳しいことは担任に直接話すとAが言ったため母親から報告を受けた。担任はAには中学校のこともあり、ぜひカウンセリングを受けてもらった方がよいと考え母親に伝えると承諾があった。彼は行きたくないと言っているのも母親だけになると思う。母親は中学校時代のことがあるので、いじめには敏感で、誰か特定したがっている。学年の顔写真を見せて欲しいとさえ言っている。この件では学校側で検討したい。今後は必要に応じて担任とも話し合いながらすすめることになる。

6、面接経過（スクールカウンセラーをSCと略記）

#1（×年・6・19）

母親のみ来室、前半のみ担任同席。担任からの紹介を受け、「どうされましたか」と話しかけると堰を切ったように中学校時代から始まる不登校について涙ながらに話された。中学校の時から医療機関にかかっていたが、Aとは合わないのか彼は行きたがらないので母親が定期的に通っていた。高校に入って登校を始めたので「もう大丈夫でしょう」と言われた矢先にこんなことが起きてしまった、と高校でおきたトラブルについても言及。中学校の時は学校の対応がひどくて、本人と家庭の問題であると見放されてしまった。高校ではそのようなことなく、ここを紹介してもらった、と安堵された。母親は本人がどうして学校に行かないのか、本人の口から説明を聞きたくてせまってしまう、反対に殴られたりしてしまう、とつらそうにこぼし、今も叩かれて身体が痛い、とさす。入試については、母親が自分で手続きをして、彼に受検するようにすすめ、受かったのがこの学校であった。3年生になってからほとんど勉強らしいことはしていなかったが、それまでは勉強をしていたので受かったと思うし、行って欲しいと思うばかり。と母親の必死の思いが伝わってくるが、常に暴力を受けてしまう関係は非常に危険であると伝え、彼と話をしたいと思うと距離を取って欲しいと助言。朝起こす時も体を触ってしまい、

暴力を誘うきっかけになりやすいので特に気をつけて欲しい、と伝える。これには母親も苦笑しながら考えている。

2 (×年・6・26)

母親は彼のいじめ発言を気にして、彼にその内容を話す様に強くせまってしまう、再び彼から暴力を受けた。母親に距離の話再度してこれを守って欲しいと話しあう。さらに昼夜逆転の生活を気にして、どうしても朝起こす時から暴力沙汰になる。母親もこれはどうにかしなければと思っていたらしく、学校へ行くのか行かないのか、弁当も作った方がいいのか、と途方にくれる。夕方には起きているので、翌日の朝のことを彼と話し合ってみては、距離を置いて、と具体的に母親に伝える。今では親が学校に行けと言っても行かないのはよく承知している。それなら、彼に翌日の登校をどうするのか聞けばよい、行くのならどのようにして朝起こすのかそれも聞いてみればよいし、弁当も彼に聞いてから用意したらと。もっと離れて彼をよく見て欲しいのである。母親は息子とこうした話はしたことがなく、いささか驚いたようではあったが、どこかで合点もいったようである。彼は中学校の時担任が友達をよこしてくれたが彼が苦手とする人たちであったので会えなかった話をして、高校はどうなの、と暗に高校のことを気にしているのがわかった、と母親。中学校の時のように学校を敵視しているわけではなく、何か期待しているのかな、と母親は感じている。この彼の高校への期待感について担任に伝え、彼との接点を作った方がよいと助言。中学校の時のような感情は今も持っていないようだから、電話や手紙、或いは家庭訪問、等で学校が彼を忘れてはいないことを伝えるチャンス提案。

3 (×年・7・17)

母親が彼との接触に努力を始めてから、少し落ち着いたのか食事を家族と取るようになった。登校について話し合った時、期末試験は受けると言ったので学校に伝え別室受験にしてもらえた。しかし、受けたのは一日だけだった。朝は声はかけてくれと言ったので、毎朝時間には声をかけると一応返事はする。間に合わない時刻になってから再度声をかけると「休む」というのでそれ以上は何も言わないでいる。「ただただ寝てるだけです」、と母親は泣き出すが、母親の朝の我慢と努力とを多に取り上げた。これまでのように部屋に入るのをやめ外からの声かけ、彼に触れない、など随分異なる母親の態度に彼も落ち着きを取り戻している様子を互いに確認したのである。ロッカー事件の話になると彼は今もこだわっているかのように、自分が手を出さなかったことから、根性がないと言われ傷ついた、やり返せばよかった、と言う。母親はいじめの問題を気にしていたが、学年主任と担任との家庭訪問があった。母親の希望した学年の顔写真を持って来られたので、彼がどの子か特定してくれれば指導してもらえるので母親はおおいに期待した。しかし担任、学年主任と会っていじめの話が切り出されると彼は手を震わせて、写真も見ようとしなかった。母親には写真は見たくない、そのことは触れてほしくない、忘れたい、と言い、母親も過去のことにはこだわらなくて今後のことを考えないと、と担任に伝えたという。彼はどうやら、本当のことを言えば、反対に報復されるのではと恐れていると母親は感じたという。そんなに怖がることがわからない、とこれからどうするのか、成績とかもどうなるのかわからない。S Cからは厳しいが高校になると、一定の出席や成績がないと進級も卒業も認められない。この事実を彼が最もよくわかっておく必要があるので担任から詳しい説明を受けるように勧める。逆にこれからはしっかり計算できるぐらいになるといい、と母親と話した。彼は、他の高校に転校するよりは今の高

校に通いたいと母親にもらしている。夏休みは学校の話は一切しないで忘れましょう、それより外へ出ないなら家族とでいいから遊びに出かけませんか、と提案しておく。

担任とは高校の進級、卒業の仕組みをしっかりと本人に伝えるように助言。中学校の時のように不登校のまま卒業証書だけが届くようなことはないことを知らせないわけにはいかないからである。欠課時数という考え方も重要なので課目についても事実を伝えるように話しあった。担任としてはあまり事実を知ると登校の意欲をなくさないのかが不安であるという。それでも事実を知っておく方が重要であることを話し合った。

4 (×年・9・4)

宿題を提出するために登校するように本人に指示があり、保健室で担任と会う。母親が車で送ってくると一人で保健室へ行った。保健室は正門から近くで誰にも会わずに入ることができる。翌日も宿題の件で、短時間登校。以後短時間だが登校続く。今日は私が用事があるから（母親の面接時間が11時30分からである）と本人に言うのとそれに合わせて11時半に保健室に入った。迎えに来るのが一時間後だと言っている。保健室では何か勉強しているようだ。やっと学校へ行け気になってくれてほっとしている。夏休みは宿題は熱心にした。毎年、きちんとやっていた子で真面目。この夏休みはSCの言うように学校の話は極力しないで、外へ出たら、とか誘った。外へ出ることはなかったが、一度だけ家族旅行で出掛けた時は楽しんでいただと思う。私も楽しかった。祖母の入院が続き、彼には祖母も長くはないので不登校で心配ばかりかけないで、と言ってある。彼も分かっている、とはいう。今は祖母の介護とAの問題とが重なってしまって本当につらい。家族旅行の後、もうすぐ夏休みが終わる頃だったと思うけど、庭に出て私の車を洗ってくれた。このようなことは全く初めてのことで驚いたけれどうれしかった。彼はいつのまにか背が伸びてひょろりとしていて痩せたなと思った。色も青白いし、無理もないかなと思うけど。担任から2学期当初より夏季中の宿題提出を機会に保健室へだが登校を始めたと報告をきく。最初が肝心なので、無理強いして在校時間を延ばしたりしないように助言。翌日への余力を残した状態で帰らせる方が、登校が連続する。それと登校時間を一定にした方が日常生活も安定するので彼と話し合うように。

5 (×年・9・9)

文化祭当日であるが、彼はこの日も11時半に登校した。私の用事がすむまで保健室にいる。高校の文化祭は私も彼も始めて。できれば見たいな、とは思いますが彼次第で帰りたいと言えば仕方ない。母親の送迎つきなので母親の負担が問題であるが、祖母の入院先と学校が近くなので、この帰りに病室に寄れるのでなんとかなっている。最近朝は起きるようになっていて、今は11時に登校、一時間いて帰宅、となっている。SCからはこれからは一定の時間の登校と時間が伸ばせるなら伸ばしていけたらいいね、と話し合う。文化祭は全く準備には参加しなかったが、クラスのTシャツに彼の名前が入っていた、うれしい、と母親。彼もTシャツをじっと見ていたらしい。

6 (×年・9・25)

登校は続いている。支度がなかなかで私がカバンの中を点検して車に積み込んでいる、と彼が自分の身体を運んでいるだけの様子が伝わってくる。これも彼の社会適応力を培う機会の喪失につながるわけで今回は母親の世話の焼き過ぎが話題となる。実に細々した世話を焼き、彼も当然のようにしている。妹

にも同じように？と尋ねると妹はいずれ外へ出て行く立場なので何でも自分でやらなければならない、と兄妹への母親の育て方の大きな違いを問題にもしていない。妹は何でも自分でできているので、家庭を離れても困らないだろうが、彼は準備や整理を母親がしていて、自分のカバンの中身すら知らずに登校して困るのは彼ではないか、と投げかけた。母親は彼が学校で困ることになる、という話には耳を貸し、彼の学校生活に必要な準備や整理は彼自身であることを母親なりに考えることになった。担任との話し合いでは中間考査を受験するために保健室での勉強に目的を持たせること、そのために在校時間を伸ばしていく提案を。勉強の目的で学校にいるなら、クラス生との接触の機会を、ノートを見せる、会いに行く、などクラスから保健室へ足を向けてもらうアプローチも。担任も彼なりに保健室で頑張っていることを周りに認めてほしいと思っているようで、クラス内で彼の様子は伝えていくように努めている。

7 (×年・10・2)

保健室には色々な生徒が入り出している様子を彼はよく観察している。彼は自分の姿が皆によく見えない場所で勉強をしているが、そこで保健室にやってくる生徒と先生との会話を聞いている。バイトの話や付き合っている異性の話やら、先生の悪口やら実に様々であり、保健室でそのような話をしていることが最初は信じられなかった様子。母親は彼の話に吹き出してしまいそうになりながら毎回聞いている。実に彼にとっては社会勉強になっているね、と母親と笑いながらその意味を確認する。今では自分の持ち物は自分で用意し、制服等の始末も自分でしている。自室の掃除も自分でしている。母親が意識して彼にまかせようとしていて彼も受けいれている。

8 (×年・10・9)

2学期に入って初めて休む。昨日から明日は休むと言い行かない。がっかりもするが、今は頑張っていると思うので何も言わなかった。最近では夜早く寝るにはどうしたらいいか、と私に聞きにきたり自分でも生活の仕方について考えるみたい。入浴も遅く、イライラさせられることが多いが、早い時間に入ってみて、自分でも「早く風呂入ったらゆっくりするな」と実感するように言う、と母親はうれしそうに報告。

9 (×年・10・23)

中間考査を別室で全科目を受けることができた。こればかりは朝から登校して受けたし、家でも勉強していた。部屋にいる時間が長く、部屋では教科書やノートを広げていた。彼は今頃になって中学の時学校に行っておけばよかった、授業受けていたらもっとわかるのに、と言う。さらに、中学時代いじめた人たちのことを今度会ったら殺す、と激しい言葉を吐く。あいつらのせいで学校に行けなかった、とか学校の教師も何もしてくれなかった、と怒りだす。私たちは何時までも過去のことばかり言っただけではない、もっと前を見て、と彼に言うが彼はそんな気分ではないようで時に泣き出すこともある。確かにあの中学校は当時荒れていて、最も乱暴な生徒たちをクラスを中心に据えて責任を持たせて学校をまとめようとしていた。それは大人しい目立たない子らにはほとんど目をやってももらえないわけで幾ら言っても無駄だった、と母親も憤りを隠さない。

担任へは朝からの登校が可能になった今、これまでに出来なかった授業（一時間目など）も出るように働きかけるのはどうか提案。担任も同様に思い、彼に話しているが彼は頑固に自分で決めた日時から行く

と言い張る。教室での授業参加も予定して彼に働きかけている。席は廊下側の一番後ろにしてあり、何時でも出入りできるようにした。

#10 (×年・10・30)

教室での授業に入った、とうれしそうな母親。中間テストの成績もずっと授業出てないわりにはできた、と担任や他の先生からも言われたらしく気をよくしている。事件の相手の生徒はもう気にならないみたい。それよりも登校途中で中学時代の友人たちと出会わないか気にしている。そんなの向こうがすでに忘れてしまっている、といくら言ってもこだわっている。学校に行けなかった原因をやっと言い出した。例のロッカー事件の時に、全く違う中学校出身の生徒から、かって不登校だったことを指摘されたといい、これで自分の過去が広まっている、と思ったらしい。彼は学校中に自分の過去が知れたと恐れ、怯えていたとわかる。母親もようやくいじめ、と彼が言っていたことがこれかと合点がいったようである。保健室に閉じこもってはいたが、学校に登場するうちに彼なり何か判断ができたようで怯えは軽減し、クラス生の好意を受け止め、クラスによく入ったと言える。保健室の養護Tの報告では教室で授業を受けることには同意していたが、いざ教室に行くのは渋っていた。そこへクラス生がやってきて一緒に教室へ行こうと誘われ、断れないまま教室へ入ったということらしい。授業が済むと一目さんに保健室へもどってきて、「あっという間だった」と報告している。

#11 (×年・11・6) ~ #16 (×年・12・11)

今月に入って初めて自転車通学を始めた。とても疲れた、と言ってはいるがまんざらでもない感じであった。弁当を持って行って学校で食べるようになったし、安心してきた。車の送迎はしんどいとこぼしたので考えてくれたのか。(#11) 自転車は一回だけ、やはり車を当てにしている。いつまでも甘えるな、と言いそうになるが言うともう行かないと言われそうで怖くて言えない。祖母はとうとう亡くなった。(#12) 自転車通学はこれまで3回くらいはやっている。一度は自転車の鍵をなくしたらしくメールが入った。よく探す様に電話を入れたが心ここにあらず、という感じだった。また、いじめで隠されたパニックになっていたように思う。家で落ち着いて探せばカバンの中にあるのを見つけてとても喜んでた。何かなくなるとスグに私に言ってくる、Aも夫もそう。娘は自分でちゃんと探すのに。でも、最近自分でもう一度探す、ということができてパニックは減ったように思う、と苦笑。夫は母親の私以上に繊細なのか、息子のことや職場のことなどしんどいことがあるとスグに頭に十円髡げができてしまう。細かいことまで気にするのであまり夫には言えないことが多い。この週から午後の授業にも出るようになった。少しづつだけどよよんとしていると思う。(#13) 自転車の一件は担任からも報告を聞く。「鍵がない、どうしたらいい」と20分くらい立ち尽くすばかりで一人では何もできないように思えた。結局鍵を壊してもらって乗って帰った。今も出ようとしめない授業があり、欠課の問題も出始めた。授業は教科担任から、ただ教室にいるだけ、ノートも取らない、本も開かない、これでよいのか、という声もあがっている。本人には言っているけどわかっているのかどうか。この頃は中学校の時学校に行かなかったことを悔やむようなことを言い出した。(#13) 最近中学時代のことをよく持ち出す、僕はどのようにして学校へ行かなかったのか、僕は損をしていたのでは、と言い出して、当時の教師や友人たちの発言を思い出しては泣いたり、怒ったりしている。「僕は何をしてきたのだろう」とつぶやき、とても可哀そうだと母親も泣く。期末考査は教室で受けると言って、勉強もやっているみたい。自転車通学は慣

れてきたのか誰かと会うと厭だから、と朝からは出られないが3時間目の授業に出るように家を出る。今は弁当も作っておくと持って行く。家でもよく食べるようになった。(＃14) 中学時代の話の繰り返し、私たち夫婦もやりきれない。SCからは、学校に行けなかった現実に気がついて苦しんでいるので、今こそ家族の支持が彼にとっては必要であると伝える。(＃15) 期末試験は教室で受け、彼なりに頑張ったと思う。だけど授業で出ていないのがあるようだ。体育は一学期の柔道の時、彼は左利きだけど右利きだけの説明しかなくて困ったらしく、担任にはそれを伝えたが彼はその翌日から全く行かなくなった。まだ中学時代の話が続いている(＃16) この日は校内研修で全員での守秘義務を確認して後、Aの事例が担任より発表された。Aなりに頑張っているが今も一時間目からは受けることはないし、体育と芸術は全く受けていないので進級が困難であるという現実を知った時に、本人がどう反応するのかといった不安を語られた。SCからは中学校からの引き続いた不登校から少しづつ現実へ向かいつつある青年としてみると成長が見られている。特に家庭内が落ち着いてきて、外側へ向かっていくエネルギーも回復しつつある点を見ながら支援を学校とともにすすめたい。担任とはこれまでに細かい打ち合わせをつけてきたことも有効であった。進学か留年かは学校のルールがあるので彼によくわかるような説明が必ず必要である、等話す。(＃16)

＃17 (×年+1・1・15) ～＃20 (×年+1・2・5)

3学期は始業式から登校した。冬休みは久しぶりに趣味のラジコンを始めた。足りない部品を買いに行ったり、色々いじっている。妹は普段クラブと塾で忙しいけど、この間少し二人でゲームして遊んだ。妹も兄が学校行き出して安心している。最近はAも力がついてきたのか、祖父の田畑の仕事を見て、重いもののかついでやったりしている。身体もしっかりしてきたように思う。(＃17) 教室で席替えがあったみたいで、今度は賑やかな子たちの傍らしく嫌がっている。それでまた保健室によく行っているらしい。ところが保健室も人がたくさんいる時があり、そんな時は保健室も嫌になって困っているみたい、と母親は苦笑。でも一人友達ができたようなことを言っている。名前を急に言い出して、その子の話をする。気になってるみたい。最近は中学校の時の話はあまりしなくなって、登下校の道を色々走ってるみたい。始めて走った道の話もする。これまでは必死で行って一目さんに帰ってくる、という感じだった。SCからは外の世界が段々と怖くなくなっているのかも、と伝えると母親の顔がほころぶ。(＃18) 体育の授業で学校の周りを走った。走っていると、どんどん目の前の景色が変わって、おもしろかったし、気持ちよかった、とうれしそうに話し、体育も授業受けているのがわかった。体育もようやく参加したが、これまで長い間でいていないので恐らく欠課の問題があるかも、と母親と話し合う。A自身は高校のルールを理解しているのか尋ねると、担任から説明を受けているから分かっていると思う、と母親も心もとない。(＃19) 担任からの報告では3学期は朝から登校して頑張ってくれているが、成績が何とも悪い。教室では今は教科書も開いて、ノートも取るようになっている。期末考査でうんと頑張ったらそれを評価する先生も出てくかも知れないが今の様子では留年かも知れない。クラスでは特定の友人Cと行動を共にするようになった。その友人はクラスに彼女がいて、その彼女の後を追いかけているような生徒であるが、Aにはやさしく接してくれて、Aも彼の傍にいる。(＃19) 成績がよくないので心配、不登校というより今は成績が気になる。本人はわかっているのかどうか、私たちも成績を上げることや出席日数のことなど話すことがあるけど、わかっている、というばかり。最近はそれよりも「友達が欲し

い、俺だって友達と映画行ったりハンバーガー食べたりしたい」と言うのだと母親は涙ぐむ。日曜日は一人であっちこっち遠出をしている。連れが欲しいのだな、と思うとかわいそう。(＃20)

＃21 (×年+1・2・12) ～＃24 (×年+1・3・4)

登校は普通になって私も最近はその子にも何も言うことはない。弁当さえ作って机に置いとけばさっさと行ってしまふ。あれだけ外へ出られなかったことが嘘のよう。食事もよく食べて、気がついたら身体もがっちりしてきたような感じ。(＃21) 軽音で何?と聞く。クラブ活動のポスターを見たらしい。AもCDをよく聞いているが、自分の趣味と学校での活動とがまだ結びついていない様子、学校全体がまだ見えていない。体育で走ったのが気持ちよかったので自分もクラブ活動をしてみたい、ともらす。(＃22) 期末テストが近づいてきて勉強しているけど留年になったらどうするのか心配。やってないところはわからない、と言うので塾を誘っても今はいい、と言うし。クラスでは彼が友達だと思っているCのために、職員室や保健室に率先して入ってきて職員に声をかけてくるので職員間で意外な声を聞く。Aなりに友達と連れ立って、友達の役に立ちたいと思う行動をとっているようだ。(＃23) 期末も終わり、いよいよ進級か留年かの連絡がくるといふ。留年は嫌、と言いながら左程気にしていないのか好きなラジコンの手入れを楽しむ。進級しても、落としたものの試験など受けながらだから大変だし、留年をして今この学年と離れてまた新たに慣じまねばならずどちらも大変だと話し合う。

＃25 (×年+1・4・23) ～＃33 (×年+1・7・2)

欠課時数や成績から留年と決まった。春休みはのんびりとラジコン仲間と機嫌よく遊ぶ。新学期は4日連続で行った後、その週末「僕不登校になる」と言うが冗談だと思っていたら全く行かない。彼が言うには「僕は浮いている、留年生だから馬鹿にされている」と泣き出し留年が負担になっている。自転車通学で中学時代の友人達と出くわすのが今はつらい。すでに自分が留年生だと知っているのではないかと再び被害感に襲われている。新担任は男性で彼のこの混乱に手を貸そうと懸命。しかし、母親は現担任の話がわかりにくい、と困惑。担任は彼との連絡にも困っていたので、直接会って話し合うなどできることを助言。(＃25) 両親で来室されたが、父親の不安は大きく早速転校の相談に。しかし、自宅では彼は以前と違って夕方からラジコンをして外で遊んだり、必要なら自転車でいきたいところへ出かけている。両親と彼についてこれまでの経過からわかったことを確認しあった。新しい場面に慣れにくい、怖がる。真面目で勉強は嫌ではない。友達を欲しがっていて一人であることがつらい、それが被害感に膨らんでしまうことも。今は不登校と留年とがセットになって2重のマイナスを持った人間としてとても横並びにはなれないと感じているのかも。しかし、彼の留年は他の生徒と違って怠けたのではなく、理由があったことと、辞めてしまうよりやり直すことは恥ずかしいというより誇りに思ってもいいくらい、この点を彼とよく話し合っただけで欲しい、と伝える。父親は考え込む。(＃26) 昨日担任の訪問があって、今日は登校した。彼は担任の訪問があると翌日だけ登校している。面接中に担任とAとが部屋に飛び込んできた。彼が教室も保健室も落ち着かない、と言うので連れてきた、と担任。彼と再び保健室登校から始めよう、教室は無理して入らなくとも、と話し合うが、彼は母親に再び送ってもらうのも嫌、明日の遠足は行かなければならないから行く、と硬い態度のまま母親と帰宅。突然の状況に母親は戸惑い、SCは母親との面接状況から自分のことが取り上げられているという感情に苦しむかも知れず、母親自身の問題について時々会っていることを彼に説明した。担任は4月当初はもっと元気だったと言ひ、

今の悪化した状態に戸惑っての行動であったようだ。(＃27) 彼は先週の登校以来行かない。しかし、「自分は他の学校に行っても直ぐには慣れないから今の学校しかない」と言い少しは自分のことがわかっているのではと母親。父親は転校先を探せと言い続けている。(＃28) 最近は落ち込んでいて何もできないみたい。担任はよく来てくれるがAは「来ても意味ない」と言う。私も話しが難しくてわからないし、本を勧められた。今の私達は本を読みたいわけではない。(＃29) ますます顔色が悪くなるので聞いてみたら、前クラス生が留年生だと言いふらしていると泣く。登校したとき、前クラスの生徒が二人教室を尋ねて来てくれたことがあった。それを彼らはどうして来たのか、自分のことを学年中に言いふらしに来たに違いない、と言って聞かない。前担任に確認して欲しいとさえ言う。いっそ聞いてやって欲しい(＃30) 休みます、と毎日電話を入れるのもつらい、と母親泣き出す。「よく休みますね、頑張ってくださいよ」と言われ、何も休みたくて休んでいるのではないのにひどい言い方だ、これまではこのようなことはなかった。担任から前クラス生のことを説明受けたみたいでそれからは何も言わない、やはり善意で会いに行ってくれてたみたい。(＃31) 相変わらず行かないが、最近は家族のいる時間に顔を見せたり、外へも出る。学校はここに、とこだわっていたのが最近は他に変わってもいい、と言い出してパソコンで調べた学校を見につれていこうと思う。そこも見て比較させたらと思う。また夜が眠れないと言い出して病院も連れていこうと思う。(＃32) 学校は3校見つかったので、一緒に見て回ろうと思う。今は他を見ていいというので。しかし、電車が苦手と言ってるので通うとなるとそこが心配だが。担任はあれからもよく来てくれるけど、学校の対応も悔しい思いをして複雑。この夏休みは学校巡りをして、2学期は他の学校に決まっていたら来ないかも知れない。今は全くわからない。(＃33)

2学期になって担任からの報告を聞く。夏季中に行った3校の学校から一つ決まったようで2学期直前で転校していった。担任の話では少し遠い所で通えるのか、という危惧を持たれていた。経過としては、何とも中途半端なものになったが、家族が彼を支援していった結果であるとも考えるとこれも一つの選択である。

7、考察

長い経過を細々と報告したが、S Cが学校内で行うmanagementの実際を紹介するためでもあり、この経過から考察を行う。

①母親面接で取り組んだこと

この母親との面接は具体的で行動面に重点がある。初回の面接から、内面の苦渋を語るよりも外側のできごとに話が展開していて、母親の感情の矛先も内面ではなく相手の学校であったり、息子であったりした。また、自分への不安や後悔などはほとんど見えることもなく、行動的であった。こうした判断から面接は具体的で支持的なものに心がけた。このために母親は熱心に通ったと思われる。最初の具体的な援助は息子と距離を作ることであったが、これまで息子のことではまるで一体感を抱いたように同じ怒りと苦しみを持ち、自分のことのように接していたために、息子からの暴力も引き出していた。

つまり、彼にすれば母親と言えども、かってに心の中に侵入してくるような息苦しさがあったのではと推察される。侵入してくるだけでなく、母親を納得させるため説明を求められそれができないと責められるわけで、彼なりに逆襲せざるを得なかったと考える。母親には直接彼から何でも引き出そうとするのではなく、彼をどう理解するのか自分でも考えてみようとう働きかけ、そのために彼に近づくのではなくむしろ離れてよく観察してみようと提案したのである。家族ならではの知っている部分がたくさんあるわけで、聞かなくとも見ているだけでわけがわかってしまうことも多いし、少し考えただけで理解を得ることはできるだろう。暴力が日常になってしまうと、次第にエスカレートするのは簡単であるし、これは絶対に防がねばならない。暴力沙汰は母親も問題にしていたので取り入れてもらえ、当然のごとく彼の反撃もなくなる。そして、筆者に伝えるべくよく観察しては報告するようになった。

次に問題としたのが、彼への世話の行きすぎである。一家の長男として、隅々まで彼を守ろうとする姿勢で育てられてきたことが彼の発達に大きく影響を与えたと考える。日常の細々したことは母親がやってくれるので、彼は自分で行動する力を身につけ損なっている。例えば、学校での不満やトラブルは母親には訴えても自分から言うことは少ない様子。高校での体育の授業で困っても（左利きであるのにその配慮がなかった）教科担任には何も言わず、ただ母親に訴えるだけである。もともと柔道のような格闘技は苦手で、それを理由に授業を回避したとも考えられる。これも能動性やその先にある攻撃性の発達に問題があったと考えられる事象である。また、中学校での最初のトラブルと思われる事件（扉を閉め忘れて怒鳴られる。彼は怒鳴られたことで怖がり、怒っている）も、ただしつけとして身につけ損なったことが引き金になっていると考えられる。そして、彼が最も恐れていたことは、クラス内でトラブルが生じて学活の時間に説明を求められ、うまく言えずに泣き出してしまったことが広まってしまうことであったという。彼なりに言いたいことを言ったり、やられたらやり返すべきだと考えていたのにできない自分をとても恥じているのである。彼の弱い部分を見て知っている人たちに出会ってしまうことを恐れていた。それが広まることをもっと恐れていた。これらが彼を脅かし、簡単に周囲への不安を生み、周囲への被害感を育ててしまっていたと考えられる。つまり、家族が彼を守りすぎたことで、彼が現実を恐れることになってしまったという仮説である。この点については母親とは常に具体的な話が続いたために、こうした見えにくい部分については話が十分にできなかった。しかし、母親は怖がりすぎる、とは感じていたので取り上げる機会があったといえる。母親は彼が外で苦勞する、とう側面ではすぐに了解して細かい世話は止めてしまい、彼も文句も言わず自分でしている。それでも自分のことのように考え、行動してしまう傾向までは話し合えずに終えている。

②面接や学校からの情報でわかるAについて

Aは中学での引きこもりから高校入学後再登校を始めたばかりで再び不登校に陥った。親子ともに中学校に対して怒りをもち続けていたし、不眠等や引きこもりに対しても本人は受診の動機もなく、家族以外誰とも接触がなくとも困ることはなかった様子。つまり、友人関係といった社会場面での人間関係にあまり開かれることなく中学校時代を経過している。小学校まではよく遊んでいた、との事実から、中学生になり損ねた部分があったのかも知れない。中学校では学習やクラブ等において成績が順位として明らかになるし、クラブはメンバーの中で正選手か補欠にわかるし、全体への奉仕もうたわれる、クラスの授業は教師が入れ替わり、一日の流れは生徒たちがよく知っている、といった具合で明らかに

小学校時代のように常時大人が見守ることもなく、仲良しが第一ではなくなる。こうした社会生活に入れない子どもたちが中学校で突然来なくなり家庭や学校を戸惑わせる。彼はその1人である可能性があったと考える。現象としてはいじめや脅し、乱暴が彼を脅かし、それらに何ら対処できないで、怒りを抱いて引きこもったのであるが、彼の怒りは外へは向けられないためにさらに内向して、持続した力を持ち続けていた。こうした感情を社会関係の中で発揮できないわけで、中学生になって登校できない人たちの共通するのがこの社会関係での能動性や攻撃性の発揮である。ほとんどの生徒はクラブ活動や日常の交友関係の中で微妙な調整を行いつつ、こうした能動性や攻撃性を発揮している。彼の失敗はここにあると言える。高校に入ってからをつらい過去に蓋をしての頑張りは逆に何時知られるかの大きな不安を背負っていたわけで、知られた瞬間には彼を脅かす。それが一旦は保健室登校に守られて回復できたにもかかわらず、留年というもう一つ汚点が重なって彼は撤退してしまった。しかし、短い間であったが彼は、この間教室を経験している。授業に出ても本も開かずノートも取らず、学校からはよい評価を得ていなかったが、彼自身はただ学校生活に目を奪われていたのではないか。クラス生の様子や教師の授業、教師と生徒たちとのやりとりなど色々刺激を受け勉強どころではなかったのかも知れない。この頃は家で中学校時代の後悔を繰り返す口にして親を悩ましていた。自分が怒りで引きこもっていた間に自分が失ったものに気がついたようで、母親に自分はなぜ学校に行かなかったのか、損をしていたのではないかと問いかけている。高校生活ではこの失敗に向かってやり直し、彼なりに成功した。3学期には授業を受け、勉強して、彼なりに行動を共にする友人を見つけた。彼に頼ってくれたのか、彼はその友人のために校内を移動し、教師に声をかけたりして友人の役に立とうとした。彼のしたかったことではないか。だから、留年生としての彼は再不登校になっても以前ほどにはまいることなく、担任を批判したり（中学時代は担任と会うことを拒否していたが今では会っている）、好きな時に出かけたり、好きな遊びに熱中できて明らかに能動性は消えていない。これまでと異なっている点である。再び不登校に陥ったものの怒りに身を任せることはなく、慣れない仲間から自分から身を引いたかに見える。程なくして、皆に留年が知られたとの被害感が出現するが、やはり知られる不安に脅かされたようである。このために、彼は転校へと方向転換した、と考えられるが同様な不安を抱えたままである。

③教員との連携、協力

最初の年度の女性教師とは、細やかな打ち合わせや話し合いが必要な時にはできていた。そして彼自身についても色々質問をされ理解しようと努められていた。彼は母親との関係が中心の生活が長く、そういった意味では女性とのコミュニケーションにはなじみがある、と言える。女性担任の働きかけが彼の学校生活を助けたと言えるだろう。進級には及ばなかったが、再び学校に登場できたケースとして学校内でも教師群の思いを新たにしたと思われる。中心人物の母親と女性担任とは同じ母親として気が許せた上、かわりが具体的であったことがこの親子を支えていた。留年後は男性担任に変わり、校内では不登校問題への経験が豊富な人物として評価もあり、後を託された形となった。しかし、最初からこの親子との接点は難しく、努力は報われることの少ない結果となった。何度も家庭訪問を繰り返しては話を続けたことは大変なものであったと思われるが、この親子には残念ながら通じなかった。学校内での配慮として前担任はクラスを掌握した段階であったので色々手を打てたが、今回は入学早々でのクラス運営であり、彼への配慮も簡単ではなかったであろう。彼がクラス生に抱いた疎外感はむしろ当然で、

教員、クラス生共々新しい事態になれるために自分のことだけに精一杯であったとすると、誰も彼に振り向かなかったのではなくその余裕がなかったからである。しかし、彼にとってはそれがつらかったのであり、彼の待つ力もまだ乏しいとすれば止むを得ない状況ともいえる。現担任の失敗とばかりは言えないであろう。教師は教育のプロではあってもこうした援助関係での人間関係のプロではない。むしろ自分の資質を活用し、それが魅力ともなる職業である。Aにとっては男性教師とのかかわりは今後の課題として残されたと言えるだろう。父親は母親よりも彼を守ろうとする傾向が強かったのである。

8、スクールカウンセリングにおけるmanagement

今回の事例は、この学校に赴任してのほぼ最初のケースといってもよい。どの学校でもカウンセラーという異職種を直ぐに使いこなすことは簡単ではない。何をしてくれるのかよくはわからないからであるが、授業や日常業務といった学校の大きな仕組みとは異なった時空間にある、といった意味では保健室の機能と似ている。似ているが違っているのは、身体病を扱わないことと、精神的な事柄にしても偶発や単発はあまり扱わないことである。事件や事故を扱うにしてもその直接の扱いというより、それによって引き起こされる影響を最小限に留めるべく援助を集中的に、或いは必要なら長期に渡って行う。今回は一年以上にわたって、不登校・引きこもりから始まって社会参加をめざす若者として、その参加できる力を見出し育てるために家族と共同し、学校と連携した。わかり易いケースとして登場したので、学校のなかでSC体験をしてもらえる機会として母親面接を繰り返し、学校での取り組み内容やタイミング、注意点など話し合った。また、教師からの校内での彼の行動報告はSCにとって彼を理解する貴重な局面を与えてくれた。教師は大きな集団の中での子どもの行動をよく捉え日々教育に活用しているが、筆者の職業では同じ情報でも見ているポイントは全く異なっているので、ここに一つの現象を異職種で理解を交換したり、互いに活用できるものが生まれるのである。一つのケースを通しての具体的なかわりもさることながら、教師集団や管理職との接点、全体としての生徒群へのアプローチなどそのmanagementはさらに広げられ、個々の教師への仕事や家庭生活へのカウンセリングや学校全体へのサポートとして、校内研修会での役割などがある。管理職とは時々ではあるが現状報告や意見交換を通して、普段見えない部分について理解を得て、学校としての教育姿勢について話し合う。管理職に関心を抱いていただくことも大切なmanagementである。生徒全体へは、集会でのミニ講話やお知らせなどで顔を見せるとともに、関心を育てる機会を持つ必要がある。今の社会は外向性優位で、明るく、といった言葉が躍り、悩んだり、立ち止まることにあまり評価を与えない傾向がある。子ども達は負の部分は隠したり、気がつかない振りをして生きてしまうかもしれない。自分を大事にすることの真の意味を伝える機会も逃せないのである。

9、まとめ

社会的能力の低い青年とその家族への支援を紹介したが、彼は再び別の高校（単位制高校）での再出発にある。彼なりに学校への参加と交友関係を強く望み、それを懸命に家族が支えようとしている。彼のやり直しは過去を不問にしているので結局はその不問にした過去に脅かされてしまう。しかし、つらい過去を受け入れるには、自分の力を信じるが必要であり、今はそれに向かってのtryを場所を変えてやろうとしている。全日制とは異なって、よりルールの緩やかな学校ではAなりのペースが認められる可能性もあり、よい方向と言える。彼の苦手な体育や芸術への参加はより許容的な中で努力が認められる必要がある。彼は頑固な側面も持っていて、全日制でのルールには直ぐには適応できなかったかも知れないからである。登校に成功すれば、次に過去を受け入れる課題が待っている。なお、彼には当初から発達障害の疑いも持ち続けていたが、今もその可能性は否定できないものと考え、母親にはその可能性について伝えてはある。母親は即座に否定したが、今後の適応能力の発揮を見ながらであるが受診については母親も同意しているので今後の課題である。

参考文献

- 1) 国松清子 (1996) 'management' としてのスクールカウンセリング
季刊「心理臨床」9 (2) PP.98~103 星和書店
- 2) 国松清子 (2005) 不登校生徒の親面接—スクールカウンセリングをManagementして— 奈良文化女子短期大学紀要第36号 pp.103~114
- 3) 河合隼雄 (編) (1979) 生徒指導とカウンセリング ミネルヴァ書房
- 4) 佐治守夫・神保信一 (編) (1979) 現在のエスプリNO139: 5号 登校拒否 至文堂
- 5) 若林慎一郎著 (1980) 登校拒否症 医歯薬出版
- 6) 山中康裕著 思春期内閉症J uvenile Seclusion 治療実践よりみた内閉神経症 (いわゆる学校恐怖症) の精神病理
- 7) 中井久雄他 (編) (1978) 思春期の精神病理と治療 岩崎学術出版
- 8) たたら幹八郎著 (1993) 学校恐怖症の研究 (!) 登校拒否—その症状形成に関する考察 児童精神医学とその近接領域 4: 221
- 9) 高木隆郎著 (1965) 学校恐怖症の典型像 (!) 児童精神医学とその近接領域 6: 146
- 10) 平井信義著 (1975) 登校拒否症の概念 日本文化科学社
- 11) 内山喜久雄 (編) (1983) 登校拒否 金剛出版
- 12) 詫摩武俊・稲村博 (編) (1980) 登校拒否 夕斐閣
- 13) 佐藤修策著 (1983) 登校拒否児 国土社
- 14) D.W.Winnicott (1965) The Maturation Processes and the Facilitation Environment (牛島定信訳 情緒発達の精神分析理論 岩崎学術出版)
- 15) James F. Masterson (1980) From Borderline Adolescent To Functioning Adult: The Test of Time (作田勉他訳) 青年期境界例の精神療法 星和書店